



2024年度
地域コミュニティ学科研究教育報告書

フィールド×発見



「フィールド×発見」刊行にあたって

2023年4月に地域コミュニティ学科が開設されてから2年が経過しました。2024年春に一期生154名は2年生となり、あらたに二期生167名が入学しました。

学科の学生の多くが受講する大学の教室は、相変わらず活気に満ちています。教員の話に耳を傾け、ノートを取り、グループワークでは近くの学生同士で自由闊達に議論しています。今年度は、学科のカリキュラムの目玉となる2年生対象の「地域コミュニティ学発展実習」が初めて開講されました。社会と産業、健康と福祉、人と自然のそれぞれの領域で、各教員の指導のもとじっくりと地域に向き合い、仲間とともに、大学のなかでは学べないたくさんのことを吸収できたはずです。

学科パンフレットの作成やオープンキャンパスでは、1年生と2年生が学年を超えてともに協力しあう姿が見られました。経験のある2年生が1年生に教えるばかりでなく、1年生が積極的に意見を出しそれを尊重し合うような場面が多く見られました。

少し気が早いですが、この春には新たに三期生が入学してきます。先日、学部4年生が優れた卒業論文の成果を発表する「教養学部の学びを知る」のイベント（本学教養学部主催）に来てくれた本学科への入学予定者たちが、初対面であるにもかかわらず瞬時に打ち解け、はじけるような笑顔で互いに盛り上がっている様子は、目を見張るものがありました。彼らの入学を待ち遠しく思うと同時に、協調性や社会性、コミュニケーション能力といった彼らの能力を本学科でさらに伸ばしていったもらえるよう、より良いカリキュラムを提供しなければという思いを新たにしました。

本誌は、2024年度の学科の出来事や、主要な専門科目の授業内容をまとめたものです。昨年度の報告書よりもボリュームが増え、写真が多くてわかりやすく、読み応えもあるものとなっています。本学科の特徴ある学びについて、本誌をつうじて少しでもみなさまにお伝えできれば幸いです。

2025年3月 地域コミュニティ学科長 菅原 真枝

Review of 2024

2024年度 振り返り

—学生の活躍ぶり—

4月

二期生167名が入学

地域コミュニティ学科へようこそ。
笑顔いっぱい。みんな希望に満ち溢れています。



2024年4月2日撮影 二期生167名

4月

新入生オリエンテーション4月1日～5日

学科のカリキュラムについて学び、資格取得も視野にいれて時間割作成を行いました。
地域構想学科と地域コミュニティ学科の先輩リーダーがサポートしてくれるので安心です。



リーダーによる黒板アート



教員全員が自己紹介

4月

新入生ウェルカムデー4月9日

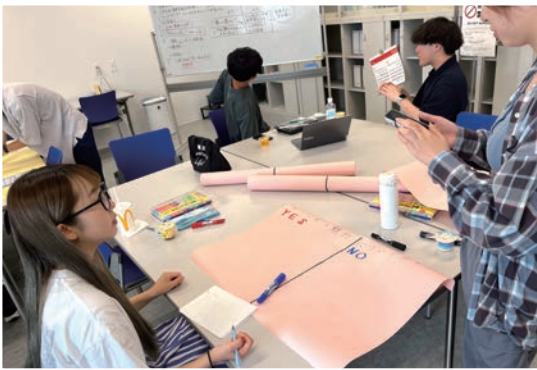
政策デザイン学科と合同のイベントが行われました。全体会のあと各教室に分かれてランチを食べながら交流を深めました。



6・7月

オープンキャンパス 学生主体の企画運営

有志の学生スタッフがブースを企画運営しました。高校生に学科の魅力を伝えるため、事前に何度も集まって話し合い、準備しました。当日は、パネルや動画を用いて、授業内容や実習の楽しさを説明しました。模擬講義では、多くの来場者の前で基礎実習や発展実習での学びについて語ってくれました。



Review of 2024

教員紹介

「知の杜」で学び、つながり、
そのめぐみで地域社会の
未来を育む。

地域総合学部
学部長



い が くら ま さ し
伊 鹿 倉 正 司
金融論

社会と産業



い す る ぎ し の ぶ
岩 動 志 乃 夫

地理学・人文地理学・地誌学

人間活動と地域構造の研究を追いながら、国内外の調査と旅を続けています。



え ん ど う な お
遠 藤 尚

人文地理学・地域研究（東南アジア）

主にジャワ島やバリ島をフィールドとして、経済成長下の農村における自然資源利用や世帯生計について研究しています。



お お さ こ あ き ふ み
大 迫 章 史

教育史・教育行政学

近代日本におけるキリスト教主義学校の特徴を、国家体制との関係で明らかにしようとしています。また、現代日本の児童・生徒の学力向上のあり方を教育行政・教育政策との関係で研究しています。



さ く ま ま さ ひ ろ
佐 久 間 政 広

地域社会学・理論社会学

過疎高齢化の著しい農山村を対象に調査研究を行っています。地域の共同活動、助け合いを手がかりに地域社会を考察しています。



し な だ み つ は る
品 田 光 春

人文地理学・歴史地理学

新潟県を含む東北地方の鉱山開発（特に近代の油田開発）の盛衰が地域へ与えた影響や、関連する産業遺産の保全活用について研究しています。



し ょ う じ げ ん
庄 子 元

人文地理学・農村地理学・農業地理学

農村における再生可能エネルギー開発、「美食」の地理的スケールから、都市と農村の関係について研究しています。



や な い ま さ や
柳 井 雅 也

経済地理学・産業地理学

経済の動きや地域づくりについて地図を使って考えています。地域スケールは世界から、町内会まで多様です。



健康と福祉

いずみやま やす と
泉山 靖人

教育学・図書館情報学

主に公共図書館を対象に、地域の「学びの場」に込められた思い(意図)や、それを実現するための取り組みを調査しています。

いちやなぎ たかひろ
一柳 貴博

特別支援教育・臨床心理学

インクルーシブ教育に関心があり、「発達障がいのある子どもの関係支援」に向けたインタビュー調査や質問紙調査を行っています。

おおさわ し のぶ
大澤 史伸

社会福祉学・NPO論、市民活動論

NPO（非営利組織）のマネジメント及びCSR（企業の社会貢献活動）について事例分析を行っています。

し みず たかひろ
清水 貴裕

臨床心理学

人間関係の問題について、「ものごとの見方」と「コミュニケーション」の観点から、解決・支援する方法を研究しています。

すがわら さな え
菅原 真枝

福祉社会学・理論社会学

老人ホームで働く外国人介護士に関心があります。特に東南アジアから来ている若者たちにインタビュー調査を行っています。

はら よしひこ
原 義彦

社会教育学・生涯学習学

地域の生涯学習を推進する公民館の充実方策を研究しています。北欧の成人教育施設の実地調査もしています。

ます こ ただし
増子 正

地域福祉学・社会福祉学

地域の福祉課題を解決するインフォーマルな活動の財源を確保するための方法（ファンドレイジング）を国内外で調査しています。

人と自然

い とう あきふみ
伊藤 晶文

自然地理学・地形学

主に東北地方の沖積低地、海岸砂丘の成り立ちや、大規模イベント（巨大大津波など）による地形変化に関する研究を行っています。

つぼ た ます み
坪田 益美

社会科教育学

多様性を尊重し合いながら、あらゆる人にとって、より生きやすい社会を構想し、自ら参画し、他者と協働する民主主義社会を実現する市民を育てる教育について、社会科という科目を中心に、研究しています。

ひらぶき よしひこ
平吹 喜彦

生態学・ESD

「生態系の恵み」を大切にして、潤いのある暮らしを持続するための調査・提案・実践を、主に大津波被災地で継続しています。

もくだい くにやす
目代 邦康

自然地理学・環境保全論

崩壊や地すべり、高山の植生景観、開発に伴う自然破壊問題、世界遺産やラムサール条約、ジオパーク、天然記念物などの自然保護制度などについて、研究をしています。

やなぎさわ ひであき
柳澤 英明

津波防災・マングローブ森林生態系

津波が発生する理由やマングローブなどの自然環境を生かした津波対策を考えています。

Review of 2024 教育報告 I

3つの基礎論

「社会と産業基礎論」「健康と福祉基礎論」「人と自然基礎論」の3つの基礎論は、1年生対象の必修科目です。この講義では、「よりよい地域コミュニティの実現」をテーマとして、「社会と産業領域」「健康と福祉領域」「人と自然領域」のそれぞれに所属する学科教員全員が全15回の授業のうち数回ずつ登壇し、地域の課題を各々の視点から解説したり、その課題解決の具体的事例を紹介します。また、各教員が専門とするそれぞれの研究分野について取り上げるため、受講生は地域の課題を幅広い視点で理解することができるようになります。個性あふれる学科教員の魅力を知り、たくさんの学問分野を一気につまみ食いできる、とてもお得な講義になっています。2024年度は19名の教員が、それぞれ以下のとおり授業を提供しました。

■ 社会と産業基礎論

●第1回 「地域の高齢者は地域で支える」という期待は現実的か？（佐久間）

近隣関係が濃密な山村での現地調査の結果から、近所の援助によって生活を維持する高齢者世帯はないという現実を示し、それには“近隣と対等に付き合うために返すあてのない援助は受けない”との理由があることを説明しました。

●第2回 高齢者にとって地域社会はどんな意義があるか？（佐久間）

高齢者世帯にとって地域社会の意義として、①住民の共同活動による生活基盤の維持、②火災等の危機における危機突破・危機管理、③近隣の人々との「つきあい」による高齢者の自我維持、という3つがあることを説明しました。

●第3回 高齢者は住み慣れた地を離れないのは何故か？（佐久間）

「住み慣れた土地から離れたくない」という農山村高齢者の強い希望には、①顔なじみの近隣との「やりとり」、②見慣れた風景や家屋敷等の2つが、高齢者が自分が自分であり続ける上で重要、という理由があることを説明しました。

●第4回 地域とその資源① 石油資源開発の歴史地理学（品田）

地理学および歴史地理学とはどのような学問か解説し、歴史地理学的研究の事例として、近代における新潟県西山油田の開発の実態を取り上げ、資源収奪的な開発が地域に何をもたらしたのかという点について、様々な観点から探求しました。

●第5回 地域とその資源② 地域資源の保全と活用（品田）

地域資源の定義と分類および地域資源の観光資源化について解説し、近代化産業遺産に認定された石油産業遺産群とコンテンツツーリズムにおけるアニメ聖地巡礼を事例に、地域資源を保全しつつ観光資源として活用することの意義について探求しました。

●第6回 「地域で子どもを育てる」の源流（大迫）

「地域で子どもを育てる」ということを、近世日本の村に自然発生的に存在したといわれる「若者組」における教育を事例に考えました。

若者組は、村社会を存続させるために重要な教育（人間形成）機能を果たしており、次世代を担う子どもを一人前の村人へと育てていく上で欠かせない組織でした。

●第7回 「地域が抱える課題を学校教育をととして解決する」の源流（大迫）

学校教育がいかなる形で社会や産業、いいかえるならば地域や職業と結びつき、そしてどのような形である地域がかかえる課題を解決できるのかを考えました。その際、具体的な事例として、山形県旧山元村にあった旧山元中学校（通称「山びこ学校」）を取り上げ、検討しました。

●第8回 東南アジアと日本の農村文化① 農業と農村文化（遠藤）

宮城県や仙台市の状況と比較しながら、インドネシア、ジャワ島の人口密度や土地利用状況の特徴について、クリフォード・ギアツによる「農業のインボリューション」や「貧困の共有」の概要と共に解説しました。その比較を元に学術的な研究を始める際のテーマ設定のきっかけや先行研究について調べる重要性を学びました。

●第9回 東南アジアと日本の農村文化② 変わりゆく農村（遠藤）

第8回で学んだ1980年代までのジャワ農村のあり方をふまえた上で、担当教員が現地調査で明らかにした2000年代のジャワ農村の農業と農村社会の特徴について解説しました。社会経済的な変動による農業と農村の変化について、ジャワ農村と東北の状況の違いを考えるとともに、現地調査の実施のあり方について学びました。

●第10回 時空間の地域論① 自然環境と歴史の推移にみるわが国の都市（岩動）

首都圏在住者が抱く東京のタウンイメージを分析し、イメージ展開は都心からセクター性を有する特徴があることを確認しました。そのイメージ形成には沖積低地、関東ロームから成る地形や自然環境を舞台として活動してきた先人の歴史性が大きく関与していることを探求しました。

●第11回 時空間の地域論② 都市構造と産業集積（岩動）

東京の街を対象にして、川の手地区の町工場、卸売問屋街、都心のビジネス街や中央官庁街、および銀座の商業地、海の手地域のファッションタウン青山・原宿の形成と都市機能について理解し、地域の形成は時空間の論理によって成立していることを探求しました。

●第12回 都市と農村の地理学① 私たちは何を食べているのか？（庄子）

現代社会に生きる私たちは、様々な食を楽しむことができる反面、遠く離れた場所で発生した食の事件や事故に巻き込まれる危険性もあります。この授業では、農業地理学の視点から食料の生産と供給の変化を整理し、食を取り巻く環境の新たな局面を学びました。

●第13回 都市と農村の地理学② 消費される農村、生産される農村（庄子）

今日の農村のなかには、魅力ある景観や文化が観光客を呼び込んでいる地域もあれば、メガソーラーや産廃処理場が立地し、景観や環境が破壊されている地域もあります。この授業では、農村空間の商品化、惑星都市化を踏まえて、都市による農村の位置づけを学びました。

●第14回 経済地理学からみた地域① 産業立地の基礎（柳井）

地理研究の基礎である観察「見る、観る、視る」についてまず解説して、その後、産業地域の事例を使って説明を行いました。また女川町のアスヘノキボウの担当者（地域おこし協力隊）にその活動をお話していただきました。連続計について調べるように指示しました。

●第15回 経済地理学からみた地域② 地域産業衰退と再生（柳井）

統計のトリックや読み方を通じて、社会経済の見方・考え方を解説しました。その後、鹿児島県の甕島、徳島県の神山町の地域づくりの事例を紹介しながら、地域の活性化の考え方や工夫について解説を行いました。

健康と福祉基礎論

●第1回 福祉社会と地域① 地域コミュニティにおける健康と福祉の視点（菅原）

最初に、15回の授業を見渡して、授業の進め方や学習の要点・流れについて解説しました。続いて、人々が住み慣れた地域で安心して生活を営むためには人々が健康を維持することが重要であること、そこには年齢、性別、障害の有無に関係なく多様な人々が住んでいること、そうした多様な人々がともに暮らすためには、地域の福祉的な課題を捉える視点が重要であることを強調しました。

●第2回 福祉社会と地域② ユニバーサルデザインのまちづくり（菅原）

ユニバーサルデザインの概念について確認し、身の回りにあるユニバーサルデザインの商品等について紹介したうえで、年齢、性別、障害の有無に関わらずみんなが住みやすいまちづくりの事例について検討し、それらの事例に共通する考えかたを解説しました。

●第3回 福祉社会と地域③ 障害者スポーツの世界（菅原）

障害の概念や種類について解説したうえで、障害者スポーツの魅力について解説しました。障害の医学モデルと社会モデルの考えかた、リハビリ・生涯スポーツ・競技スポーツという障害者スポーツの3つの側面、健常スポーツとの違いといった事柄にも触れ、「障害」をより幅広い視点で捉えてもらいました。

●第4回 市民活動と地域① NPOの基礎知識（大澤）

NPO（非営利組織）とは何か？私たちの身の回りにあるNPOについて特に、教育、福祉、医療分野において活動しているNPOの事例を取り上げました。また、なぜ今、NPOが求められているのかを行政、企業との違いを示しながらNPOの特徴についての説明を行いました。

●第5回 市民活動と地域② NPOの事例紹介（大澤）

国内外で活躍しているNPO法人の事例を各団体のホームページを参考にしながら、説明を行いました。また、行政、企業とNPOの連携・協力についての事例も紹介しました。最後に、NPOの将来と今後の課題についても説明を行いました。

●第6回 地域福祉と地域① フォーマルな福祉サービスとインフォーマルな福祉サービス（増子）

地域の福祉課題を解決するための「フォーマルな福祉サービス」の種類とその特徴、「インフォーマルな福祉サービス」の特徴と課題を理解してもらいました。

●第7回 地域福祉と地域② 私のまちの地域福祉計画(増子)

地域福祉は、さまざまな人や組織が連携してつくりあげるもので、その指針になるのが市町村地域福祉計画であることを説明して、自分のまちの地域福祉計画を調べてもらい地域福祉への理解を深めてもらいました。

●第8回 こころの健康とは？（清水）

「健康」とは何かについてWHOの定義から考え、近年の健康についての考え方（健康生成論）とレジリエンスについて解説しました。また、現在の自分自身のレジリエンスを測定してもらい、その構成要素である物事の捉え方が精神的健康に及ぼす影響について解説しました。

●第9回 人とのつながりと健康（清水）

レジリエンスの構成要素である人間関係が精神的健康に及ぼす影響について考えました。特に、地域の課題である社会的孤立を取り上げ、社会的孤立が心身の健康に及ぼす影響とそのメカニズムについて解説し、社会的孤立を防ぐ支援のひとつとしてソーシャル・サポートについての理解を深めました。

●第10回 学校と地域① 地域コミュニティと学校（泉山）

子どもの成長発達において、地域コミュニティと学校が果たす役割を理解することを目標として、学校統廃合・へき地教育・学校支援地域本部制度について概説した上で、事例紹介により理解を深めました。

●第11回 学校と地域② 地域における学びの機会（泉山）

子どもの成長発達に対して学校と地域における学びがどのように関わるかを理解することを目標として、不登校に対する学校外での支援、学び直しとしての社会教育について概説した上で、事例を元に理解を深めました。

●第12回 教育支援と地域① 地域とつながる特別支援教育（一柳）

発達障がいを取り上げ、その特性や困り感について解説しました。また、学校や地域における支援として、特別支援教育における多様な学びの場や、病院や発達障害者支援センター等の機関について紹介しました。最後に、動画教材を使用して「ふつうとは何か」を考えました。

●第13回 教育支援と地域② インクルーシブ教育と共生社会（一柳）

インクルーシブ教育と共生社会について解説したうえで、社会モデルの考え方を踏まえて「しょうがいとは何か」を考えました。さらに、インクルーシブ教育の推進に向けた取り組みを紹介し、「誰もが生きやすい学校や社会の実現に向けて何ができるか」を考えました。

●第14回 高齢者とQOLと生涯学習（原）

この回の小テーマは1) 生涯学習・社会教育領域の研究分野紹介、2) 生涯学習とは何か、3) 高齢者のQOLと学び、の3点です。高齢者の学びが高齢者のQOLを高めることを、調査結果を参考にしたディスカッションを通じて理解を深めました。

●第15回 地域での学びと生活（原）

充実した高齢期を生きるために必要なことについて、教育と学習の面から考察しました。地域にはさまざまな学習の機会や場があること、それを支える人、行政、社会のあり方について検討しました。また、その内容を受講者自身がレポートにまとめました。

■ 人と自然基礎論

●第1回 自然災害と防災① 自然災害と防災の基礎（柳澤）

初回のガイダンス後に、「自然災害と防災の基礎」というテーマで授業を開始しました。自然災害がもたらす被害の大きさは、その地域の自然環境と人間社会の状況に応じて変化することから、まず自然が引き起こす災害要因を知った上で、社会の要請に応じた対応策を検討するための方法について探究しました。

●第2回 自然災害と防災② 自然災害とリスク（柳澤）

日頃から私たちは、身近に潜む自然災害の危険性を知り、それに対応するための最善の方法を選択していくことが重要です。自然災害とリスクという観点から、災害の大きさと頻度の意味を考えるとともに、防災対策の課題について探究しました。

●第3回 自然災害と防災③ 災害と地域性（柳澤）

どのような場所で自然災害が発生しやすいのか、またどのような時に自然災害が発生しやすくなるのか。こうした災害の地域性を知った上で、その地域に適した防災対策のあり方について考え、その有効性と課題について探究しました。

●第4回 地形と人間生活① 日本は世界有数の自然災害多発国（伊藤）

人間が生活する場所を形づくる地形が、いつ、どのようにしてできたのかを理解することにより、さまざまな場所の自然災害発生リスクを評価できることを提示しました。そして、自然地理学（地形学）の視点から、なぜ日本で自然災害が多発するのか探究しました。

●第5回 地形と人間生活② 日本人はどのようなところに住み、周辺の土地を利用してきたのか（伊藤）

過去の（都市化が進行する前の）日本人の居住地とその周辺の土地利用を取り上げ、沖積低地（沖積平野）、丘陵地およびシラス台地の事例を通して、それぞれの土地利用の実態が地形条件に適応していることを探究しました。

●第6回 地形と人間生活③ 地形から自然とのうまい付き合い方を教えてもらう（伊藤）

過去にどこで、どのような自然現象が起きたのか、その土地の地形から理解できることを提示しました。次に、国土交通省ハザードマップポータルサイトを利用して、現在または将来の生活場所における自然災害発生リスクを探究しました。

●第7回 景観生態と地域① 生態学とランドスケープ（平吹）

地域の特徴は、景観（ランドスケープ）となって現れます。第6回までの授業で学んだ地域の災害履歴や防災対応、地形、土地利用について振り返った後、「環境と生物（ヒトを含む）のかかわりあい」を考究する生態学の視点から、景観を読み解く方法や意義を、描画や模式図作成を通して探究しました。

●第8回 景観生態と地域② 里山・里地・里浜に学ぶ（平吹）

20世紀後半にモノや情報のグローバル化が急進する以前、人々は自給自足、資源循環、相互扶助を大切にしながら、地域という空間、環境、社会で暮らしていました。丘陵地、沖積平野、海岸を取り上げ、自然環境の特徴と伝統的な知恵・技法・思想について、「持続可能性」に着目して探究しました。

●第9回 景観生態と地域③ 生態系サービスとその持続的享受（平吹）

「自然の恵みと災い」の下で暮らす私たちは、気候変動、大規模災害、環境汚染・破壊の深刻化によって、かつてない危機に直面しています。Nature-based SolutionsやSDGsといった国際的な取り組みを紹介し、その背景、実践事例、課題を探究しました。

●第10回 「多様性との共生」の意義～自然との共生が生み出す伝統文化と継承の意義（坪田）

ここまでの授業で学んできた人間と自然環境との関係性についてふまえた上で、地域の伝統文化が、そうした人間の自然環境の中でよりよく生きるための知恵として伝承されてきたことの意味や価値、重要性について、具体的な事例を通して学びました。

●第11回 「多様性との共生」の価値と必要性（坪田）

前回の学びをふまえて、「郷に入れば郷に従え」という諺の意味について考えるとともに、「ひょうたん島問題」というシミュレーション教材を通して、多文化共生のメリットとデメリット、多様性を尊重することと共生することの違い、困難さなどについて考察しました。

●第12回 「多様性との共生」の重要性～環境教育を事例として（坪田）

ここまで、異文化、多文化が生まれる背景としての人と自然との関係性について学んだことを振り返りつつ、身近な違和感や防災・減災さらにはより良い未来の構想・実現における多世代、多様な人々との連携の重要性について考察しました。

●第13回 自然環境の保護① 人類による自然の利用（目代）

自然環境の保護を考える前提として、これまでの人類による自然の利用の仕方を理解し、自然がどのように評価されてきたのかを理解しておく必要があります。そこで、今から約1万年前の農業の開始期や、18世紀の産業革命を題材に、人類史における人と自然との関係を探究しました。

●第14回 自然環境の保護② グローバルな環境問題（目代）

工業化社会における人類による自然資源の利用の結果、グローバルな環境問題が引き起こされています。その一例として地球温暖化問題を取り上げ、その実態について解説し、問題解決の可能性について探究しました。

●第15回 自然環境の保護③ ローカルな環境問題（目代）

現代社会における環境問題は、14回で扱った地球温暖化のようなグローバルな問題だけでなく、それぞれの地域において発生している問題も多いです。これは、自然環境の保護という観点からだけでは解決しない問題であり、地域のあり方そのものを考える必要があります。1970年代以降、世界各地で取り組まれているローカルな環境問題の解決方法について解説し、そうした方法論に基づいた実践をより良いものにするにはどのような事柄が必要か探究しました。

Review of 2024 教育報告Ⅱ

地域コミュニティ学基礎実習

1年生の実習科目として「地域コミュニティ学基礎実習」が行われました。この科目は地域調査のためのデータ収集・解析、レジュメ作成、発表技法の基礎を習得することを達成目標とするものです。

2024年度は6つのコース（5週で1コース）が提供されました。これらのコースは「社会と産業領域」、「健康と福祉領域」、「人と自然領域」の3つの領域から提供されており、15週のなかで全領域のコースをまんべんなく受けることができるよう、カリキュラムが作られています。今年度は学生が30名程度のコースに分かれて実習が行われました。

■ コース1 仙台市中心部を人文地理学的に理解する

●担当教員

岩動志乃夫・遠藤 尚・庄子 元（社会と産業領域）

●授業内容

第1週…人文地理学の手がかり

研究視点の学問である人文地理学は、社会や生活、経済などの様々な事象が研究の対象となります。この授業では、各担当教員が自身の研究内容を紹介するとともに、地名や土地利用、分布など、人文地理学の研究を行う手がかりを学びました。

第2週…カフェという空間と場所

この授業の前半では、人文地理学のキーワードである「空間」と「場所」について、飲食店やアパートを例に学びました。授業の後半はグループに分かれ、仙台市中心部のカフェを事例に、空間を理解するための方法である分布図の作成に取り組みました。

第3週…城下町仙台的成り立ちと中心商店街の業種調べ

日本の都市には城下町を起源とするものが多く、その都市構造には一定のパターンがあります。授業の前半では、城下町としての仙台的成り立ちについて学びました。後半では、仙台市の中心商店街である東一番丁について、2004年時点のゼンリンの住宅地図を用いて、2000年代初頭の路面店の業種分類を行いました。

第4週…都市の構造と機能に関する論文講読と発表・討論会

旧奥州街道の変容、中心業務街の都心機能、商店街や歓楽街の景観や経済的地帯を調査する仙台市中心部のフィールドワークに向けて、都市を観察して理解するための論文を提示して講読し、その内容を発表・討議して基礎知識を身につけました。

第5週…仙台市中心部でのフィールドワーク

この授業では教員ごとのグループに分かれて、仙台市中心部でフィールドワークを実施しました。フィールドワークでは、第1～4週で学んだ人文地理学の手がかりから、仙台市中心部がどのように成立・変化し、どんな空間・場所として機能しているのかを理解しました。

●担当教員からのコメント

この授業では論文の講読や発表、フィールドワークから、人文地理学における地域の見方、考え方、捉え方についての基礎知識を身につけました。一連の実習を通して、受講生各自が自らの得意な点、苦手な点を確認することができていました。それを踏まえて、3年後の総合研究に向けてさらに学修を進めて欲しいと思います。



▲ 城下町仙台巡検で江戸時代の大橋をVR体験中



▲ 仙台市中心部におけるカフェの分布図作成

■ コース2 仙台市中心商店街の見える方・見せ方

● 担当教員

佐久間政広・柳井雅也・品田光春（社会と産業領域）

● 授業内容

第1週…本の読み方

学術的文章を読むための技法やレジュメ作成の手法を学びました。宮内泰介『人びとの自然再生』（2017）を題材に、レジュメ作成、構造的な読解、グループ討論を実践しました。

第2週…地図・文献・統計の探し方、読み方

地理院地図、今昔マップ on the web など Web GIS の利用法と新旧地形図の読み方を学び、授業後に読図作業を行い提出しました。また、CiNii research、Google Scholar、J-STAGE、TGUサーチ等の利用法および統計の種類と信頼度について学び、e-Stat と RESAS を使って仙台市の人口の地域的特徴について調べました。

第3週…商店街実習の基礎知識

仙台市中心商店街関連のコラム、統計、地図を使ってワークショップ形式で討論しました。授業後に当商店街の実態と課題を整理しました。

第4週…現地調査

一番町4丁目の読図を行ったうえで、現地を訪問し、店舗の特徴や集積、景観の移り変わりなどについて、解説と現地でのディスカッションを行いました。

第5週…まとめと発表

世代別に見た商店街の見える方や特徴を整理し、ワークショップ形式でディスカッションを行った後に互いに発表しました。授業後は実態調査の意義を整理して提出してもらいました。

● 担当教員からのコメント

まず、研究論文の読み方指導を通じて、論文の構成、文献の評価の仕方、文献の記載方法、統計・地図の調べ方と読み方の基礎をアクティブ・ラーニングによって学びました。そのあと、仙台市一番町4丁目を対象に、学んだことを適用しながら実地調査を体験することで、学術的な調査法を身に付けることができました。



▲ 一番町4丁目での商店立地の説明



▲ 一番町4丁目での商店街調査



▲ ワークショップでのグループディスカッション



▲ ワークショップでの地図作業

■ コース3 宮城県の市町村における健康と福祉

●担当教員

増子 正・原 義彦（健康と福祉領域）

●授業内容

第1週…オリエンテーションとレジュメ作成のコツ

授業で求められる簡単なレジュメの作成を行いました。

第2週…論文・文献検索のコツ

論文作成時に必要な文献の検索を国会図書館、本学図書館のOPACを使って行いました。

第3週…宮城県内市町村の「健康と福祉」に関するデータ収集のポイント

宮城県が公開している健康と福祉に関する統計データから関心のあるデータをピックアップしました。

第4週…収集したデータ分析の方法

実際に収集したデータを分析して健康と福祉の課題について考察を行いました。

第5週…レジュメの作成と発表

それぞれが分析し考察した健康と福祉に関するレジュメを作成して発表を行いました。

●担当教員からのコメント

健康と福祉に関する仮説設定の方法、及びデータ収集のコツと分析方法を伝えるとともに、発表用のレジュメの作成に力点を置いた指導を行いました。最終週の発表を終えての振り返りの結果では、「データを理解する力は身についたか」に対しては、「かなり身についた」が70.4%、「少し身についた」が29.6%で、全員が肯定的な回答をしていました。また、レジュメ作成の基本的事項の理解については、「だいたい理解できた」が96.3%となっていました。

さらに、地域課題の分析・考察・発表の力を伸ばすことで今後心がけていきたいこととして、「予想、データの収集、考察の3つを主軸に自分の求めたい結果をいかに出すのか、どのデータとどのデータを比べて何が言えるのかということを考えられるようにしたいと思います。」「4年生の卒論の時期までには課題発見、分析、考察の能力はすでに身につけている状態にしておきたいので今回の実習で学んだことを2年生の発展実習で生かし、今回考察した内容よりもさらに踏み込んだ考察をできればと考えています。」など、課題探究への積極性を感じることができると記述が多く見られました。



▲ 発表についてのディスカッション



▲ グループに分かれて発表

■ コース4 ノーマライゼーションを目指して!!

●担当教員

大澤史伸・菅原真枝（健康と福祉領域）

●授業内容

第1週…ノーマライゼーションとは

ノーマライゼーションの概念の歴史的な変遷とその受容について学びました。何が「ノーマル」で、何が「ノーマルではない」かの境界は文化や時代によって変化することを理解しました。社会的な期待や偏見について批判的に考える力を養いました。

第2週…調査・解析技法入門

社会福祉調査の基本的な技法について学びました。情報収集のしかた、論文検索サービスの利用方法、統計調査の二次利用のしかた、レジュメの作り方や引用の仕方について学習し、具体的なテーマに沿って実際にレジュメをつくる訓練も行いました。

第3週…車椅子利用者による特別講義

車椅子利用者をゲスト講師としてお招きし、特別講義を聴講しました。普段の生活のなかで感じるバリアや障害をどう理解するかについて、当事者の視点からお話を伺いました。本やインターネットでの情報だけでは理解できない当事者からみたニーズと社会課題について深く考えさせられました。

第4週…キャップハンディ体験（構内および大学周辺地域のフィールドワーク）

車椅子および高齢者体験セットを使用して、構内および大学周辺で体験的なフィールドワークを行いました。構内のコンビニや食堂に行ってみたり、近くの荒町商店街まで出かけて買い物をするチームもありました。

第5週…グループ発表と質疑

フィールドワークの成果をスライドにまとめ、チームごとに発表を行いました。どんなところに便利さを感じたか、逆にどんなところにバリアを感じたか、具体的な写真や説明をまとめて意見交換を行いました。普段の学生生活では感じることもないバリアの存在を意識化すると同時に、視野の広がりを実感することができました。

●担当教員からのコメント

障害のない社会の実現のためにはどのような視点が必要かについて考えることができました。障害者と聞くと「体の不自由な人」「支援が必要な人」というイメージをもつ学生が多いなか、講義が終わった頃には「どんな助けを必要としているかは本人に確認して、自分ができることをする」「周りの理解があって環境が整えば障害は障害ではなくなる」（受講生からコメント）というように、障害に対する理解が大きく変化しているようでした。



▲ チームごとの発表の様子

■ コース5 身近な地形や洪水ハザードを読む

●担当教員

伊藤晶文・柳澤英明（人と自然領域）

●授業内容

第1週…レジュメの書き方・作り方、文献調査・情報収集の方法および引用の仕方

主に実習や演習、総合研究での報告の際に作成・配布するレジュメの役割などを学び、分かりやすいレジュメ用ファイルの書式例を学びました。次に、CiNii Researchなどの論文検索サービスの利用方法、引用の仕方、および参考文献リストの作成方法を学びました。

第2週…室内作業：地理院地図（Web地図）を用いた地形判読と空中写真判読

宮城県愛子盆地に分布する河岸段丘を対象に、地理院地図（Web地図）の各種ツール（傾斜量図の重ね合わせや断面図）と、2枚の空中写真を用いた実体視による地形判読方法を学びました。

第3週…高さの測り方とフィールドワーク：三角測量の原理を知る

学生が持つスマートフォンの角度センサー機能を使って、三角測量により、土地や建物の高さを測る方法を学びました。さらに、地域の自然を探究することに生かすため、米ヶ袋の段丘や広瀬川河川敷を歩きながら、崖を計測して高低差を実感するとともに、災害の危険性について考察しました。

第4週…室内作業：Google Earthを用いた調査データの整理

第3週で実践したフィールド調査により得た写真データや調査地点、経路、記録などをGoogle Earthにてマッピングして、土地の起伏や洪水ハザードとの関係性を理解しました。

第5週…フィールドワーク：洪水と土砂災害の複合災害地区を考える

広瀬川沿いにある越路地区は、洪水と土砂災害が発生する可能性のある複合災害地区です。このような地域で、ハザードマップを見ながら歩くことで、身近な地域に潜む危険を実感するとともに、これらの危険に対する防災対策を考察しました。

●担当教員からのコメント

レジュメの作り方や文献調査方法といった調査研究に関する基礎だけでなく、室内作業やフィールドワークを通して、地域の自然環境（今回は主に地形）や自然災害リスク（今回は主に洪水ハザード）をどのように読み取り、記録するのかを体験し、その楽しさや難しさを感じてもらえたのではないかと考えています。



▲ 空中写真判読の様子



▲ 広瀬川河川敷でのフィールド実習の様子

■ コース6 「土地と緑」の特徴・成り立ちを考える

●担当教員

目代邦康・平吹喜彦（人と自然領域）

●授業内容

第1週…学術文献や地図情報の検索、整理、分析

学術的な研究情報がどのように発信されているのか講義で学び、それらをインターネット上で探し出す方法を実習しました。また、地域の自然を調べる際に必要不可欠となる地形図、空中写真、衛星画像についても、インターネット上で収集し、読み解く方法を実習しました。

第2週…地形の観察と測地

五橋・土樋キャンパスから広瀬川にかけての河成段丘地形について、1万分の1地形図で等高線を読み取った上で、図面を見ながら現地観察を行いました。等高線で示される傾斜が実際はどの程度の傾きなのかといった体験的認知を重ねながら、その場所の成因を考えたり、今後起こりうる自然災害について検討しました。

第3週…「緑」のマッピングと都市緑化施策

仙台市全域から五橋・土樋地区まで、異なる空間スケールで「緑（植生、緑地）」の存在様態を鳥の目で観察し、地形や気候、土地利用の歴史と対応づけて、「緑の多様性、分布特性、成り立ち」について考察しました。次に「仙台市みどりの基本計画」等の記述をもとに、都市緑地の種類、設置・保全の目的、管理方法、課題について調べました。

第4週…都市緑地の観察

五橋・土樋地区のキャンパス緑地、街路樹、庭園、都市公園、公開緑地などを訪問して、植物の種類や植物のサイズ・配置などを記録し、それらの差異に強く関与している役割・機能、管理方法、土壌・大気環境などと関連付けた検討を行いました。結果を個票にまとめました。

第5週…全体のまとめと発表

4回の学修・調査結果を持ち寄り、グループごとの振り返りや検討を加えながら「地域の土地と緑の特徴・成り立ち」について総括し、パワーポイントを用いた発表および質疑を行いました。また、個々人でレポートを作成しました。

●担当教員からのコメント

地域の自然環境は、生業、防災、健康、経済、文化、まちづくりといった地域の事象すべてと関連しています。そのためこのコースでは、基盤情報としての地形図、空中写真、衛星写真の所在や利用方法、地形と植生を調べる初歩的方法を、学際的な話題や視点を導入しつつ、探求的に学んでいただきました。受講生の振り返りの中には、実際に現地を歩くこと、対象に触れることで見えてくるものがあることを感じている記述がありました。



▲ 都心の公開緑地で植物の種類、緑地の管理や機能を調べる



▲ 都心の街路樹で植物の種類、緑地の管理や機能を調べる



▲ 地形図や種々の環境マップで調査地の特徴を洗い出す

Review of 2024 教育報告Ⅲ

地域コミュニティ学発展実習

2年生では、実習科目として「地域コミュニティ学発展実習」が行われました。1年生の「地域コミュニティ学基礎実習」の体験・学びを活かして、「フィールドワークを通して地域という現場で学び、考える」活動を、受講生間のコミュニケーションを深めながら、自ら積極的に進めました。

発展実習は、前期と後期にそれぞれ7クラスが開講され、受講生はそのうち1つを履修します。各クラスは11名前後の受講生で構成され、担当教員の周到な準備の下、先行研究や地域情報の収集、テーマと調査方法の検討、フィールドでのデータ収集やインタビュー、室内での解析と議論、そして発表とレポート作成が行われました。「地域コミュニティがいかんにして成り立っているのか、どんな課題や解決に向けた取り組みがあるのか、そこに暮らす生活者の視点から具体的に理解し、考究する体験」がさらに深まりました。

街の成り立ちや産業集積について必要な調査研究技法を身につけよう

●担当教員 岩動志乃夫（社会と産業領域）

●授業内容

地域の現象を探求するために必要な調査技法を習得して、さまざまな地域の調査ができるようになることを目指し、先行研究の検討、既存データの収集、現場におけるフィールドワーク等によるデータ収集、集められたデータの分析および考察といった一連の過程を受講生自身で取り組む実践的な実習を行いました。具体的には各種論文を講読し、発表、グループワーク形式の討論会を実施して知識を深めました。次にフィールド調査では、仙台市の街の原点である郷六地区の四ツ谷用水の取水地、同用水の流路と分水・支水流路について観察調査を実施しました。荒町、南材木町、舟丁、穀町、南染師町といった藩政時代の町人町の現在の姿について観察調査を実施しました。さらにキャンパス周辺の荒町、清水小路、連坊小路、土樋を対象として小売店、飲食店、駐車場の分布や聞き取り調査により、本学五橋キャンパス開学による各店舗の現状や駐車場料金等についても把握しました。

●担当教員からのコメント

受講生は街の形成、流通卸小売業、過疎地の活性化事業、先端的な商業機能の空間把握に関する論文を講読し、学際的知見を得るとともに、発表方法や質疑応答を含む討論会を経験し、学術的な学びを通して自信をつけました。フィールド調査では「なぜ仙台が百万都市に成長できたのか」というテーマで、水の存在を最も大切な要因と考え、四ツ谷用水取水口や用水沿いを歩きながら、カギとなる地点では各自調べてきた内容をワンポイントスピーチにまとめて発表し、フィールドでの討論の方法も見につけました。

キャンパスに隣接する荒町商店街が藩政時代の商店街に起因することや舟丁が河港であったことなどを学び、現在の地名や街の機能を歩いて調査して理解できたことは大きな成果でした。キャンパス周辺の小売・飲食店調査や「駐車場」の料金調査から、本学が五橋キャンパスへ移転した2023年を境として、特に飲食店が増加していること、時間貸駐車場の料金が値上がりしていること等、経済的地代が人間活動にもとづいて形成されることを学びました。その成果はグループワークを通してマップにまとめ、発表会も実施しました。なお調査で各店を訪れた際には、ランチを食べながら店主に聞き取りをするなど、楽しみながら調査を実施することも体験できました。



▲ 仙台の街の原点・四谷用水取水口



▲ 四ツ谷用水の学生によるワンポイントスピーチ風景



▲ キャンパス周辺の賃貸駐車場

社会と産業の視点からみた松島町

●担当教員 遠藤 尚（社会と産業領域）

●授業内容

観光地である松島を社会と産業の視点から検証し、その現状と課題を明らかにするため、現地調査を行いました。まずは松島町について、「位置や範囲など地理的な特徴」、「人口構成」、「主な産業」について調べ、概要を把握しました。10月23日の実習では、現地をみんなで訪問し、JR高城町駅から松島海岸駅まで歩き、情報収集を行いました。その後、大学に戻って、さらに先行研究を探したり、研究方法についても検討しました。これらの予備調査をふまえてチームごとにテーマを熟考して、決定しました。それぞれに調査計画をたて、調査先への調査依頼を行い、本調査を実施するため、再度、11月20日に松島町を訪問しました。いずれのチームもアンケート調査や聞き取り調査で得られたデータを持ち帰り、分析と考察のために頭をひねり、最後はその研究成果を報告書としてまとめることができました。なお、この授業は健康福祉領域の菅原真枝先生と合同で行いました。

研究テーマは実にさまざまで、居住地/観光地の両方の視点から見た松島町のまちづくりの現状と課題、インバウンドの防災意識、観光地における防災対策の現状と課題の検討、松島における宿泊業の現状など、さまざまな角度から松島町の現状について明らかにすることができました。

●担当教員からのコメント

行ったこと、聞いたことはあっても知らない地域について概要を把握した上で、自分達の興味関心に引きつけて学生達が自らテーマを設定しました。先行研究などを参考に、そのテーマについて明らかにするために、どのようなデータをどのように分析すれば良いのか、グループごとに検討し、調査、分析を行い、考察の上、結論まで導きました。その過程では、町役場や企業にアポイントメントを取り、限られた時間で的確に調査を行うための準備をするなど、4年次の総合研究にも必須となる経験をすることができました。この実習を通して、学生達は、実証的な地域研究の面白さと難しさを実感できたと思います。また、菅原先生と合同で行ったことで、異なる領域の観点や調査分析の手法も共有することができました。



▲ 松島で現地調査中①



▲ 松島で現地調査中②

地域調査の最初から最後まで

●担当教員 佐久間政広（社会と産業領域）

●授業内容

佐久間担当の地域コミュニティ学発展実習では、「テーマ設定から最終報告発表まで」という地域調査の全過程を受講生自身の手で行う実習を実施しました。授業は、教員の話聞いて指示に従って作業を行うのではなく、受講生たち自身による主体的なグループ活動の形で進行します。

最初に担当教員が、地域調査とはどんな営みで、どのように進行していくのか等、地域調査の概略について説明します。その後、学生たち自身の地域調査がスタートします。

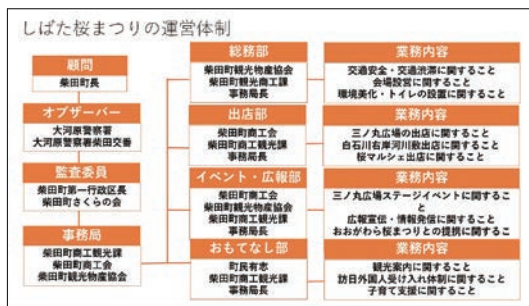
地域調査の対象地は、担当教員が指定します。2024年度は宮城県柴田町です。12名の受講生は4名ずつA、B、Cの3つの班に分かれ、班ごとに「柴田町はどんな地域なのか、柴田町の特徴は何か」を調べ、それぞれの関心からテーマを設定しました。A班は柴田町の桜祭り、B班は柴田町のスポーツ宣言、C班は柴田町上川名地区の地域活性化活動がテーマになりました。各班は関係諸機関のホームページから様々なデータを収集し関係資料を読み込み、検討を重ね、それぞれのテーマについての理解を深めていきました。

教室で十分に準備した上で、いよいよ班ごとにフィールドワークです。A班とB班はそれぞれの柴田町役場関係部局にアポイントメントをとり、担当職員にインタビューを実施しました。C班も同様に、柴田町上川名地区活性化推進組合の方にお話しを伺いに現地に出かけました。

教室に戻ってからは、最終発表に向けた作業です。各班は、それぞれの現地調査でのインタビュー内容と頂戴した資料を整理し、自分たちのテーマに沿った問いを立て、その問いの答えを探るという形式で最終発表のパワーポイント作成していきました。発表会は一度で終わりません。各班は何度か発表を繰り返し、修正を重ね、ゴールに到達しました。そうやって完成したのが、A班「柴田町における「しばた桜まつり」の運営の仕方」、B班「柴田町におけるスポーツ都市宣言の現在」、C班「高齢化の進んだ地域における高齢による地域おこしー上川名地区の事例ー」と題するパワーポイントファイルです。

●担当教員からのコメント

地域の現実とはさまざまな要因から成り立っており、それは学生たちが教室で考えるよりもはるかに複雑です。地域調査にとって不可欠のフィールドワークでは、それを実感します。フィールドでは、しばしば地域の現状を少しでも良くしようと格闘している人たちに会います。その苦勞と喜びを直に聞く経験はとても貴重で、フィールドワークの醍醐味です。担当教員は、この発展実習が受講生にとって「大変だけど大きな学びを得ることができた」実習であることを願っています。



▲A班発表スライド（しばた桜まつり運営体制）

2 取り組み事例 柴田町総合型地域スポーツクラブでの活動



基礎データ
会員数：165名
男性：18名 女性：147名
60歳以上：140名

- ✓ ヨガ
- ✓ 水中トレーニング教室
- ✓ スポーツ広場教室
- ✓ かけっこ教室 など

幅広い年齢層を対象に活動が行われている。子供たち向けの活動は、毎年夏休みなどの期間を活用して実施されている。

写真：柴田町総合型地域スポーツクラブInstagramより

▲B班発表スライド（柴田町のスポーツクラブ）

上川名活性化推進組合の活動および国の事業について

- ・ 縄文の幸運宮
- ・ 湯道製造販売
- ・ 地区内ハイキングコースの整備
- ・ 食塩煮の運営
- ・ 新そばまつりの運営 etc

- ・ 平成27年度地方創生先行型上乗せ交付事業
(地域資源を活用した小さな拠点整備事業) 事業費2000万(100%補助)
竹村再開発、風山ハイキング、読書館、レストカウインヤシヤ、B&B等

- ・ 平成28年度(2016)地方創生先行型上乗せ交付事業
(地域資源を活用した小さな拠点整備事業) 事業費1,507万(100%補助)
三浦和幸和幸、佐々木、三浦和幸
一推進組合での活動の一助として国の事業は大きく結びついていた。

▲C班発表スライド（上川名地区の活動）

■ 人文地理学・歴史地理学的視点から歴史・文化的地域資源の保全と活用について学ぶ

● 担当教員 品田光春（社会と産業領域）

● 授業内容

本実習では歴史地理学の視点から、地域資源としての歴史的遺産の価値と、その保存・活用の実態について学びました。

実習の前半では主に地図の利用法、授業テーマに関する地理学の文献講読・発表と平行して身近な仙台市内の博物館・資料館の見学や巡検を実施しました。まず学内の東北学院大学博物館で本学所蔵の歴史・民俗資料について、東北学院史資料センターでは本学土樋キャンパス内の登録有形文化財の建造物群について学びました。巡検は仙台市内を対象に2回実施しました。三居沢発電所の電気百年館で東北地方初の水力発電所の歴史的意義について学び、その後、三居沢大聖不動尊、延命地藏尊、大崎八幡宮、四谷用水跡、八幡杜の館・中島丁公園（旧天賞酒造）を巡り、近世以降地域で守り継がれてきた歴史的遺産についての理解を深めました。また、J R 仙石線旧地上線跡（仙台駅～陸前原ノ町駅）を、地理院地図で廃線前の空中写真を参照しながら探索し、景観の変化と地域資源としての鉄道廃線跡の可能性について考えました。

授業の後半では2024年に創建1300年を迎えた多賀城跡について、史跡保存の現状と観光資源としての課題および可能性について調査しました。事前のインターネットや文献での情報収集や東北歴史博物館、多賀城市埋蔵文化財調査センター展示室・史遊館の見学で得られた知識をふまえて、3班で担当エリアを分担して多賀城跡の現地調査を実施し、その成果をパワーポイントにまとめて発表しました。

● 担当教員からのコメント

歴史好きな学生を除けば、有名観光地以外の歴史的遺産を自ら好んで訪れる学生は少ないかもしれません。しかし、どの地域にも長い歴史があります。歴史は単なる過去ではなく、方法によっては将来の地域づくりのための有益な資源にもなり得るものです。この点を、歴史学を専攻としない学生に、フィールドでの体験を通じて理解してほしいという想いで実習内容を考えました。本実習では、仙台市および多賀城市の博物館・資料館および様々な歴史的遺産を訪れて、文化財の現物や実際の景観を観察し、また現地で人から話を聞くことを通じて、身近な地域の歴史的遺産の存在とその地域資源としての価値について理解を深めることができました。また、歴史的遺産を保存しつつ有効に活用していくために何が必要か、学生自ら考えることができました。彼らには今後も各地の様々な歴史的遺産についての関心を持ち続けて欲しいと思います。



▲三居沢電気百年館の見学



▲多賀城政庁跡での現地調査



▲多賀城跡六月坂地区での現地調査



▲多賀城南辺築地跡での現地調査

■ 仙台の食材・食空間・食文化

● 担当教員 庄子 元（社会と産業領域）

● 授業内容

この実習では、仙台の食文化とその供給体制について、学生たちが実践的な研究手法を学びながら調査を行いました。

実習は大きく2つのテーマで構成されています。第一のテーマ「何が仙台の食か？」では、学生たちはまず農業・農村地理学の先行研究をレビューし、発表を通じて食に関する研究の基礎を学びました。その後、3つのグループに分かれ、行政機関のウェブサイトを用いて仙台の郷土料理や伝統料理の食材構成を調査しました。さらに、仙台市立・宮城県立図書館所蔵の観光情報誌を分析し、どの料理が観光資源として注目され、時代とともにどう変化してきたかを明らかにしました。

第二のテーマ「仙台の食はどのように供給されているのか？」では、第一テーマで特定した料理の食材に注目し、仙台市中央卸売市場の統計データを用いて供給量、産地、価格の季節変動をグラフ化して分析しました。また、仙台朝市とアクアイグニス仙台でフィールドワークを実施し、店舗経営者やマネージャーへのインタビューを通じて、仕入れ状況、販売動向、経営戦略について理解を深めました。

この実習を通じて、学生たちは資料収集、統計分析、文献調査、フィールドワークなど、地理学研究に不可欠な手法を実践的に学ぶことができました。また、仙台という身近な地域の食文化と流通システムについて、多角的な視点から理解を深める機会となりました。

● 担当教員からのコメント

本実習で学生たちは行政資料や観光情報誌の分析から、仙台の郷土料理・伝統料理の特徴とその変遷を明らかにしました。注目すべき成果は、郷土料理・伝統料理を整理するだけでなく、観光資源としての利用という点から料理を捉え、食と経済活動や観光産業の結びつきを明らかにした点です。加えて、統計データを用いた食材供給の分析と、フィールドワークによる流通・販売の実態把握を行いました。これら複合的なアプローチにより、仙台の食文化が観光資源として利用される過程と、それを支える食材の流通システムの実態を示すことができました。

本実習の調査・分析では、地域の食を単なる伝統としてではなく、現代の経済活動や観光産業と結びついた動態的な現象として捉えました。こうした視点は、地域資源の活用を考える上で重要だと考えています。学生たちは、文献調査からフィールドワークまでの一連の研究プロセスを経験し、実践的な地理学研究の基礎を身につけることができました。



▲アクアイグニス仙台での聞き取り



▲マルシェ リアンでの産直についての聞き取り



▲仙台朝市での青果物の調査



▲本まぐろの水揚げについての聞き取り

■ ビール産業の地理学

●担当教員 柳井雅也（社会と産業領域）

●授業内容

経済地理学の基本的な調査スタイルを学ぶため、ビール工業の立地について学びました。論文作成のフローチャートを解説した後に、①産業全般の動向、②統計の収集と分析、③文献収集の仕方と文献の読み方、④予備調査の仕方、⑤本調査の仕方、⑥集計表の作成と分析、⑦図表の作成、⑧執筆の順に解説を行いました。これを学ぶため、ビール産業で論文作成の流れをなぞります。なお、④～⑧は調査結果の総合化になり別途時間もかかるため、工場訪問や口頭による解説で代替しました。

具体的には、まずビールの製造工程を学んだあとに、関連する文献をOPACなどを利用して探し、参考になる論文を数本読みました。ここでは国内ビールメーカーの産業特性、歴史や経営手法およびメーカー同士の競争関係、今後の課題などを学びました。併せて、そこに掲載されている統計図表を使って分析結果の確認をしたり、他に分析できないかなどの討議を行いました。そしてビールメーカー別に国内工場の分布図を作成し、国内生産分布の理由を探りました。

これらの作業後に仙台新港に立地している麒麟の工場見学を行いました。現地では製造工程の解説の傍ら、原材料調達、マイスターの役割、国内市場における当工場の商圈の説明、東日本大震災からの復興のプロセスなどを聞き取りました。こうして地元の代表的工場の立地とその活動内容を学び、経済地理学の調査法を修得するように実践しました。

●担当教員からのコメント

本実習において、学生たちはビール産業を題材に、経済地理学の基本的な調査手法を実践的に学びました。特に、統計資料や文献調査を通じた産業特性の把握に加え、工場見学による現地調査を組み合わせたことで、単にビール工場の立地要因を情報として理解しただけでなく、実態として多角的な視点から理解したと考えます。さらに、文献学習に加え統計資料を用いた分析とフィールドワークを通じて、流通や経営戦略についての知見を得たことから、地理学と学際領域（経済や経営）との関係や必要性も理解したといえます。

学生たちは文献調査から現地調査、統計分析に至る一連の調査手法を経験し、経済地理学の調査手法の基礎を身につけることができたと考えていますが、今後は自ら調査対象と地域を定めて自ら調査が行えるように、そして地理学分野に限らず近隣学問分野においても、水平思考と仮説思考を駆使して広がりのある学問的成果を獲得していけるようにと期待しています。



▲ビールに使われているホップ



▲ビールの原材料と産地



▲麦汁ろ過槽の様子

■ NPO (非営利組織) 団体での実習を通して、地域課題を知る

●**担当教員** 大澤史伸（健康と福祉領域）

●**授業内容**

本実習では、仙台YMCAにおいて、保育園、幼稚園、児童館、放課後デイサービス、サッカースクール、スイミングスクール等で実習を行ってもらいました。その実習を通して、今、宮城県においてどのような福祉課題が存在し、それに対して仙台YMCAがどのような取り組みを行っているのか、学びを深めてもらいました。

実習準備では、4～5人のグループを作り、各グループで依頼文の作成・実習先との連絡・調整・スケジュールの作成等、全てを学生に行ってもらいました。実習終了後は、その成果として、報告書の作成を行いました。報告書の作成を通して、今、どのようなことが福祉問題となっているのか、それに対して、行政や企業、NPOはどのような取り組みを行っているのか、残されている課題は何かについて考えてもらいました。

●**担当教員からのコメント**

私の担当する発展実習では、「自らが目標を設定し、行動し、考える。」ことを大切にしています。また、実習の前段階として、仙台YMCAについて調べてもらい、仙台YMCAの行っているどの事業で何を目指して実習をするのかについて、一人ひとりに発表してもらいます。また、実習終了後には報告書の作成も行います。地域の課題を明らかにして、そのために自分は今、何ができるのかということを考えてもらいたいと思っています。



▲ 仙台YMCA (サッカークラブ) での実習



▲ 仙台YMCA (放課後等デイサービス) での実習



▲ 仙台YMCA (体操教室) での実習風景

健康と福祉の視点からみた松島町

●**担当教員** 菅原真枝（健康と福祉領域）

●授業内容

観光地である松島を地域住民の健康や福祉の視点から検証し、その現状と課題を明らかにするため、現地調査を行いました。まずは松島町について、主に「松島町子ども・子育て支援事業計画」、「松島町障がい福祉計画・障がい児福祉計画」、「松島町高齢者福祉計画・介護保険事業計画」、「松島町バリアフリー基本構想」にもとづくユニバーサルツーリズムといった松島町の福祉政策を概観しました。現地をみんなで訪問しJR高城町駅から松島海岸駅まで歩き、情報収集したうえで、大学に戻って、さらに先行研究を探したり、研究方法についても検討しました。これらの予備調査をふまえてチームごとにテーマを熟考して、テーマを決定しました。それぞれに調査計画をたて、調査先への調査依頼を行い、本調査を実施するため、再度、11月20日に松島町を訪問しました。質問紙調査や聞き取り調査で得られたデータを持ち帰り、分析と考察のために頭をひねり、最後はその研究成果を報告書としてまとめることができました。なお、この授業は社会産業領域の遠藤尚先生と合同で行いました。

研究テーマは実にさまざまで、車椅子を使った観光地松島のバリアフリーの現状、松島町の介護認定率が低い理由、松島町のごみ清掃の実態、訪日外国人観光客に対する多言語表記とピクトグラムの実態と課題、店舗ごとの外国人観光客の歓迎度、松島町の子育て支援施策など、さまざまな角度から松島町の現状について明らかにすることができました。

●担当教員からのコメント

テーマごとの出発点となった「問い」を明らかにするために、これまでどのような研究がなされてきたのか調べ、自分たちはどのような調査方法を用いるか、また、実際にどこの誰にどのような調査を行うかといったことすべてを学生自身が悩み、選択しました。さらに得られたデータをどう分析し結論を出すかについても、受講生同士でたくさん意見を交わしました。さらにそれを論文にまとめるまでの作業はかなり大変だったと思いますが、受講生たちは地域研究の楽しさと奥深さを十分に感じることができたのではないかと思います。



▲ データ分析の様子(1月15日)



▲ 現地調査の様子①(10月23日)



▲ 現地調査の様子②(10月23日)

■ 地域の食文化を探る～石巻を歩く～

●**担当教員** 原 義彦（健康と福祉領域）

●**授業内容**

この授業では、初回の授業で履修者11名の地域調査テーマの希望や関心の洗い出しを行いました。第2回目は、7つに絞られた調査テーマについて、調査事項、調査地、行程・交通手段などの点から比較検討を行い、第3回目でテーマを「地域の食文化を探る～石巻を歩く～」に決定しました。また、共通テーマを「石巻の食文化」として、履修者の当初の希望・関心から「日本酒」「郷土料理」「道の駅で提供される食」の3チームに分かれて、調査を行うことにしました。第4、5回目は具体的な調査計画を作成し、第6回目（2024年10月30日）に石巻に出かけて、日本酒チームは平考酒造、郷土料理チームは元気市場と藤や食堂、道の駅で提供される食チームは「道の駅 上品の郷」を訪問し、聞き取り調査や資料収集を行いました。調査の報告書はチームで作成して成果発表もチームで行うことにして、第7～9回は調査結果の分析、第10～13回は報告書の作成、第14回は発表資料の作成、第15回は成果発表を行いました。第7回目（2024年11月6日）には、デンマークのフォルケホイスコーレの教員が授業の見学にみえ、学生たちに激励のスピーチをいただく機会がありました。

●**担当教員からのコメント**

「地域での調査研究を行うために必要な技法を、実習形式の授業を通して習得する」という目標を見据えて、履修した学生とともに作り上げた授業であったと思います。調査テーマを学生自身が発案した中から全員で決定していく過程は、その後の主体的な調査活動につながったものと考えています。3チームに分かれて調査、報告書作成、成果発表を行ったことで、各チームで課題の分析を深めることができました。授業後、「石巻焼きそば」に限らず「日本酒」「道の駅」についての知識も得られた良い活動だった。また、石巻の街並みの良さも感じられ、沢山の教養を得られて非常に嬉しかった。また、演習を通じて郷土料理グループを筆頭に他の仲間たちと交流出来たことが私にとって大きな産物だった。」との感想が寄せられました。



▲デンマークの先生を迎えて



▲石巻調査の成果発表

福祉コミュニティの形成

●担当教員 増子 正（健康と福祉領域）

●授業内容

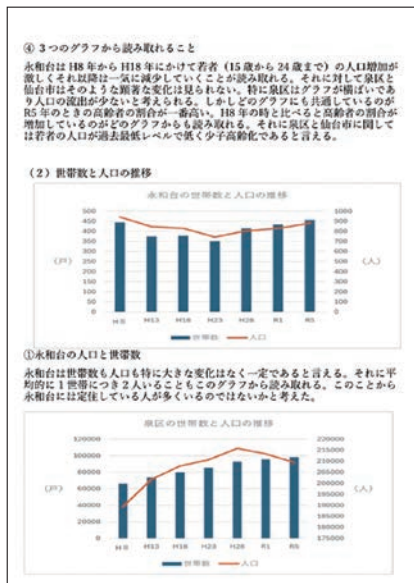
身近な地域は、さまざまな福祉課題を抱えています。多くの地域で高齢化が進み、一人暮らしになったり、通院や買い物、災害などにより個人での生活を営むことが困難になった場合を想定して、どのような地域福祉のシステムを構築すべきなのかが問われています。

実習のフィールドは旧東北学院大学泉キャンパスに隣接する永和台団地で、少子・高齢化が顕著な地区です。この地区では、松陵・永和台地区社会福祉協議会が中心となり、進行する高齢化の課題を地域通貨というツールを用いて解決に導いています。

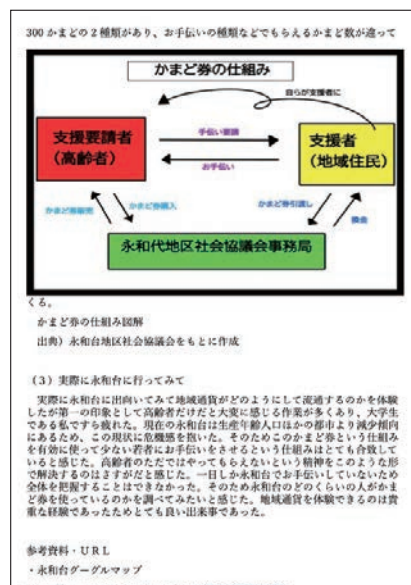
実習では平成8年から令和6年までの人口動態と想定される同地区の課題を、仙台市の住民基本台帳データから分析しています。また、同地区で地域通貨による支え合いの活動を行なっている当事者から、地域通貨実施までのプロセスをヒアリングして課題を整理するとともに、実際に地域通貨による支えあい活動に参加して「福祉コミュニティ形成」のあり方をまとめてもらいました。

●担当教員からのコメント

フィールドワークの前段階として、地域をアセスメントする必要があります。この授業では、行政の住民基本台帳のデータを活用して地域の課題を分析する力を身につけてもらいます。フィールドワーク体験後に学生一人ひとりが報告書を作成して、得られた成果を発表することでプレゼンテーション力を高めています。



▲学生の報告書からの抜粋



▲学生の報告書からの抜粋



▲地域通貨のフィールド体験

■ 仙台市〇〇区における自然と人間とのかかわりを調べる

●担当教員 伊藤晶文（人と自然領域）

●授業内容

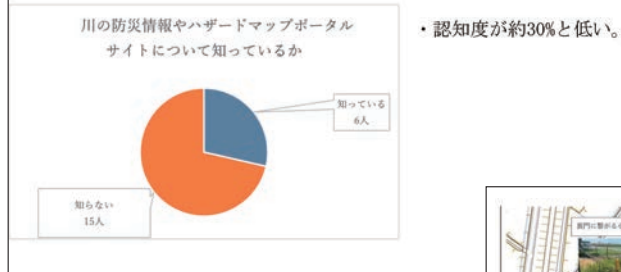
調査地域（各グループが選択した仙台市の区）に関する基礎的な情報（位置、歴史、人口、自然条件）を整理した上で、「自然と人間生活」、「自然環境資源とその保護・保全」、「自然災害」、「自然環境の汚染・改変」の観点から、各グループが取り組むテーマを設定し、文献研究、調査計画の立案、野外調査の準備を経て、仙台市内各所において、資・試料の収集や聞き取り、現地踏査を行い、データを収集しました。収集したデータをもとに図表を作成する等、データの分析および考察を行い、成果発表会による討論を経て、最終レポートを作成しました。

若林区を選択したグループは、荒浜地区の観光施設利用者を対象とした津波避難時の対応について調査を行い、避難経路の安全性や避難所（旧荒浜小学校）の収容人数についての課題を指摘するとともに、外国人を含めた観光客の避難誘導のあり方などを考察しました。泉区を選択したグループは、八乙女地区における水害時の避難に関する調査を行い、避難経路上の危険箇所をいくつか示すとともに、アンケート結果から避難に関する住民の意識が高いことやインターネットを活用したリアルタイムの防災情報の認知度が低いことなどを明らかにしました。青葉区を選択したグループは、広瀬川澱緑地の利用に関する調査を行い、自然環境の中でリフレッシュしたり、健康を増進したりする場として、地域住民の日常生活において重要な役割を果たしていることを明らかにしました。

●担当教員からのコメント

本授業では、まず自然環境を中心とした地域に関する基本情報の収集方法やその取りまとめ方法（図表の作成）を学んでもらいました。次に、各グループが取り組む課題を設定してもらいましたが、一応の方向付け（いくつかの観点）があるものの、与えられたテーマではなく「自ら問いを立てる」ことの難しさを知ってもらえたのではないかと思います。テーマがある程度固まった後は、調査目的を達成するために必要な調査方法をグループ内で検討し、野外調査を行いました。野外調査では、現地踏査だけでなく、聞き取りやアンケート調査など、地域の皆さんの協力を得ながら行われました。各グループは、調査をとおして具体的な課題を見つけ、その解決策などを考察しました。成果発表会での発表および討論の様子や最終レポートから、受講者が地域調査の基礎・基本をマスターしてくれたものと感じています。

図1 2.川の防災情報やハザードマップポータルサイトについての問いへの結果



▲ アンケート調査結果の例



▲学生が調べた避難経路

米づくりを追いかけて、里浜の水・自然・暮らしを繋いでみよう: 復興・地域づくりの現場で

●担当教員 平吹喜彦（人と自然領域）

●授業内容

東北地方太平洋沖地震・津波とその後の大規模復興事業によって、地域の状況が激変した仙台市宮城野区新浜地区をフィールドとして、主要な生業・土地利用形態である米づくり・田んぼに着目した学際的な実習を行いました。

実習ではまず、シラバスで全体の流れを再確認した後、「なぜ米づくり・田んぼに着目するのか」、弥生時代以降のコミュニティや国家の発達史と、切実さを増している気候変動や防災対策とのかかわりなどを引き合いに出して視野を広げ、実習の意義を共有しました。続いて、(1)イネの生物学的特性、農事暦、農家の暮らし、農業政策といった基礎情報を収集し、また(2)調査地域となる仙台市湾岸域における自然環境、土地利用、暮らしの変遷を、2011年3月11日の大被災とそれ後の復興の実態を中心に調べました。

野外調査は2回、予察調査と本調査を実施しました。予察調査では当該地域を巡回して、事前に収集した文献や地図情報に基づく認識を検証し、テーマと調査方法を絞り込みました。本調査では、田植えを体験してイネと田んぼに五感で触れた後、グループごとに圃場と水路の構造、水環境、生物、海岸林の広がりや再生状況などを調べました。最後に、メダカ米の生産・販売に取り組んでおられる農家や集約的な稲作を展開しておられる農業法人の方々にインタビューを行いました。

調査結果はグループごとに整理、分析、考察がなされ、「メダカ米の魅力」、「法人化による新浜の稲作復興」、「農業と海岸林の復興」というタイトルで、口頭発表とレポート作成がなされました。

●担当教員からのコメント

大学入学後、最初の本格的なフィールドワークとなるこの実習では、新たな発見の追求もさることながら、(1)野外調査に先だって室内で実行される地道な文献や地域情報の収集・読み解き、そして周到な調査計画立案の大切さ、(2)野外調査時の訪問先への敬意や礼儀、そして調査目的・方法にかかわる説明責任の重要性、(3)グループで調査結果の分析・考察・とりまとめを進める際のコミュニケーションや議論の大切さ、に対する気づきを重視しました。今後の学習では、インターネット上で容易に入手可能な先行研究や多様な画像をなぞるような活動を超えた、創造的で楽しい学びをたくさん体験して欲しいと思います。



▲圃場で、イネや農事暦を学ぶ



▲野外活動の進め方を最終確認



▲土や水の感触を確かめながら、田植え体験



▲グループごとに、調査課題を掘り下げる



▲せんだい3.11メモリアル交流館で情報収集

■ 仙台宮城野区新浜地区の砂浜海岸のゴミの実態とそれへの意識

●**担当教員** 目代邦康（人と自然領域）

●**授業内容**

仙台平野の海岸部には、砂浜海岸が広がっています。そこには大小多数のゴミが落ちています。そうしたゴミの実態について理解するため、仙台市宮城野区新浜地区の砂浜海岸で実習を行いました。

はじめに、学術論文はどのようなものか、その構造、読み方について講義をしました。そして、Google scholarやCiniiなどの文献検索サイトを用い、海洋ゴミについて文献検索を行い、文献を整理し、調査内容のテーマを決めました。今回は、1) 新浜におけるマイクロプラスチックの分布調査、2) プラスチックごみの分布・量・割合、3) 海洋ゴミに対する市民の意識という3つのテーマについて、3グループに別れたうえで、それぞれのテーマについて調べることにしました。

現地での調査前に、既存の文献から、調査方法を調べ、自分たちでできる形で調査計画を立てました。その計画をもとに、新浜海岸に訪れ、各グループでマイクロプラスチックの採取、GPSを使ったゴミの位置の計測と回収、聞き取り調査を行いました。海洋ゴミに対する市民の意識を調べるグループはアンケート調査を学内でも行いました。調査によって採取したゴミは、大学実験室で種類別に区分に、その重量も計測しました。

これらの調査の結果について11月中にまとめた内容は、12月1日にせんだい3.11メモリアル交流館で開催された、新浜町内会、Temporary Commons主催の新浜学習会において「新浜地区砂浜海岸の漂着ゴミ」というタイトルで発表しました。発表会以降は、各自、各グループで最終レポート用に図を書き直すとともに、データに基づいて考察をし、レポートについて教員が文章、図の推敲をし、レポートを完成させました。

こうした論文執筆の練習となる、現地での調査、グループでのディスカッション、論文としてのまとめの作業と同時に、新浜カントリーパークでのエクスカッションや収穫祭に参加し、地域の方々と交流、また活動の実態についても体験的に学びました。

●**担当教員からのコメント**

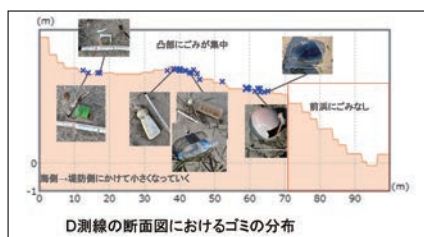
この実習は、1つのテーマについて深く調べ、まとめるための手順を学び、また地域活動と関わりを持つことでその実態について体験的に理解してもらうことを目的としています。少人数で行われるため、調査の計画、データの整理、図表としての表現、考察の仕方など、受講生は、実際に自分の手を動かし、議論を重ね、おかしいところは修正するというトライアンドエラーを繰り返しながら、より質の高いものにする作業をします。こうした経験を通しての気づきは、自然現象、社会現象に対しての洞察力を磨くことになるので、トライアンドエラーの作業を厭わずに作業に取り組んでほしいと思います。



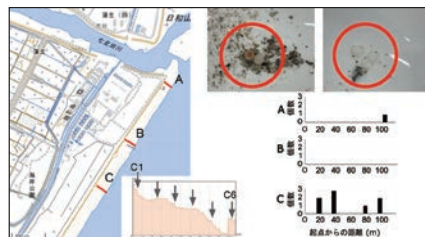
▲ 新浜学習会2024



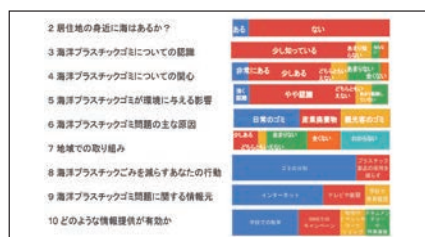
▲カントリーパーク新浜収穫祭の様子



▲ゴミ分布調査の結果



▲マイクロプラスチック調査の結果



▲海に対しての意識アンケート調査の結果

災害と地域防災

●担当教員 柳澤英明（人と自然領域）

●授業内容

この実習では、「災害と地域防災」というテーマで、人と自然の関係について考えながら、地域調査を実施しました。まず授業では学外実習の事前調査として、Web地図（今昔マップ、Google Earth、地理院地図）を用いて土地利用の変遷を分析し、地域の歴史や震災の影響、復興などについて検討を行いました。さらに3つのグループに分かれて、「なぜ、危険な地域に住むのか？」という問いに対し、インターネットや書籍を活用して考え、受講生間での議論を通じて考察を深めました。以上の事前調査の結果を参考に、地域の復興と課題を明らかにするため、仙台市内の震災遺構等で学外フィールド実習とヒアリング調査を実施しました。この調査を通じて、学生たちは資料やデータの分析、フィールドワークなど地域を分析するための基礎的な考え方を学ぶことができました。

本実習では、さらに班ごとに実習テーマを設定し、地域課題の明確化とその解決に向けた仮説を立て、フィールド調査を計画・実施しました。フィールド調査の結果をもとに、各班はレポートを作成し、実習の最終段階では成果発表会を行いました。発表では、調査の過程で得た知見を共有するとともに、地域防災における課題や改善策について具体的な提案を行いました。また他の班の発表を聞くことで、異なる視点からの分析や意見を学ぶ機会となり、より多角的に地域防災の在り方を考える契機となりました。

●担当教員からのコメント

本実習では、事前調査とフィールド実習を通じて地域の自然と災害について深く学ぶことを目的としています。単にデータを収集するだけでなく、その背景や意味を考察し、地域の課題を捉える力を養うことが重要です。そのためには、事前の調査準備をしっかり行い、自然災害の歴史や、復興過程、現状を把握した上で、フィールド調査に挑むことが求められます。また、調査結果をどのようにまとめ、どのような結論を導き出すかも重要です。そのため、調査の目的を明確にし、仮説を立てることが必要です。この授業を通じて、地域の自然と災害についての理解を深めるとともに、地域課題に対して主体的に取り組む姿勢を身につけてもらえればと思っています。



▲震災遺構荒浜小学校での聞き取りの様子



▲石巻市震災遺構 門脇小学校 学生調査報告書より

Review of 2024 研究報告

総合研究タイトル一覧

地域コミュニティ学科では、卒業するための要件の1つとして、4年次に「総合研究Ⅰ・Ⅱ」を課し、探究的な学習活動と卒業論文の作成を設定しています。科目の名称が示すように、この授業では4年間の机上やフィールド、授業や社会的活動における学びを振り返りながら、その集大成ともいえる卒業論文を作成します。卒業論文の執筆には、想像以上の時間と労力を必要とします。指導教員やゼミのメンバーに支えられながら、悩み、考えぬく時間となるはずです。

ここに掲載したリストは、今年度、地域コミュニティ学科に所属する教員が指導し、審査を経て受理された教養学部学生の卒業論文の情報です。地域コミュニティ学科で実際にどのような研究に取り組むことができるかを知る参考になさってください。

担当教員 ● 岩 動 志乃 夫

青森県におけるクラフトビール醸造所の立地と経営特性

福島市中心部における空き店舗活用とまちなか広場の利用特性

「仙台市内における牛たん焼き専門店の展開過程とその要因」

遠野市におけるホップ栽培とクラフトビール産業に関わる地域おこし協力隊の役割と評価

「道の駅」の地域特性と中核拠点としての役割
～重点「道の駅」おながわを事例として～

「宮城県亘理郡山元町における東日本大震災後のいちご農業生産法人の誕生と展開」

岩手県紫波町日詰商店街における新店舗とイベント開催による次世代へ向けた取り組み

担当教員 ● 遠 藤 尚

東北地方の若者はなぜ方言を話したらないのか
～イギリス北東部のヨークシャー人と東北人の方言意識の比較をもとに～

津波被災地における災害危険区域の土地利用

日本ワインの動向と小規模ワイナリーの存立背景
ー 仙台市秋保ワイナリーを事例にー

全国モデル「道の駅」の事例からみた「道の駅」の存在意義

山形県におけるブライダル業界の現状と課題
～山形ウェディング協議会を事例に～

宮城県における茶葉生産と流通構造について

飯坂温泉の温泉地としての認識と観光スタイルの変化について

松島町における紅葉ライトアップの形成過程と事業形態
～松島町 円通院を事例に～

仙台市秋保地区における観光形態の変化とそれによる地域活性化

複数の災害危険性がある地域における地域住民の防災意識と自主防災組織の役割
～石巻市新橋を事例に～

担当教員 ● 大迫 章史

宮城県や仙台市の小学校教員は外国語の授業においてどのような難しさを感じているか

宮城県の中学校におけるキャリア教育の現状と課題

担当教員 ● 佐久間 政広

都市近郊農村におけるコミュニティ活動としての山形紅花まつり
― 山形市高瀬地区の例 ―

なぜ大学落研に外部の諸機関から公演依頼があるのか
― 地域における大学落研のはたす役割 ―

岩手県東稲山麓の低平地における農業維持の仕組み
― 平泉町長島地区を事例に ―

宮城県大崎市松山地域における「金津流松山獅子躍」の現状と意義

仙台市における児童館の現状と課題
― 台原地区を事例として ―

都市近郊農村における高齢者の健康寿命に関連する社会活動の実態
― 仙台市泉区根白石中町地区を事例に ―

なぜ旧志波姫町「水車まつり」は30年以上続いているのか
― 新幹線駅PRイベントからの変化 ―

災害復興住宅における住民組織の活動
― 宮城県石巻市を事例として ―

福島県福島市における子育てサークルの実際
― 2つの子育てサークルを事例に ―

担当教員 ● 柳井 雅也

山形県米沢市小野川温泉の現状と課題

過疎地域の商店街における新規開業事業者の実態と課題
～宮城県栗原市栗駒岩ヶ崎地区六日町通り商店街を事例に～

新潟市中央区沼垂地区における商店街再生

自主防災組織の実態と存在意義について
～岩手県宮古市沿岸部を事例に～

松島町のカキの現状と課題
―磯崎地区を事例に―

消滅可能性自治体における多世代交流施設の現状と課題
～山形県上山市二日町プラザを事例に～

福島県大熊町における避難指示解除後の移住・定住の現状と課題

復興商店街がまちの復興に果たす役割
～南三陸さんさん商店街を事例に～

担当教員 ● 泉山 靖人

子ども食堂の現状と課題
―ビーンズふくしま、むすびえの事例を参考に―

担当教員 ● 大澤 史伸

少子高齢社会における専門農業協同組合の役割
―福島県桑折町「伊達果実農産物直売所 だてかベジフル」の事例から―

子どもの成長と競争

少子高齢化による野球人口の減少とプロ野球球団の取り組み

民間主体の地方商店街振興における現状と展望
～六日町通り商店街～

中学運動部活動の地域移行の円滑化について

アニメツーリズムを活用した地域振興の課題と観光誘致の可能性
～宮城県岩沼市「バクテン!!」・山形県天童市「3月のライオン」を事例に～

農産物の地域ブランド化と地域の持続的発展
～山形県河北町「かほくイタリア野菜研究会」の取り組み～

山形県の中小企業におけるSDGs取り組み事例について

担当教員 ● 清水 貴裕

理想自己と現実自己の差異と自尊感情・本来感・優越感の関連について
— 理想自己と現実自己の内容に着目して —

傍観者がいじめを止めに入るきっかけについての検討

ステレオタイプと数処理課題の遂行成績との関連
— 「文系」というカテゴリーに着目して —

休息方法の違いが単語テストの成績にもたらす影響

大学生のInstagramの利用と友人関係満足度の関連について

ひとりの時間の頻度と孤独感の関連

旅行がモラトリアム期の大学生に及ぼす効果について

教職課程履修者における教員志望の迷いと継続について
— 職業価値観の違いからの考察 —

担当教員 ● 菅原 真枝

災害時要援護者の避難生活
— 東日本大震災における高齢者福祉施設の事例をもとに —

視覚障害者のスポーツ活動の課題と発展
— 宮城県仙台市のスポーツクラブを事例として —

高齢者の介護サービスに対する意識と家族の要因

白鷹町の紅花産業の現状と課題

生涯学習が高齢者に与える効果
— 宮城県社会福祉協議会「宮城いきいき学園」を事例として —

福島県郡山市の音楽都市宣言が市民にもたらした影響と課題

高齢化による団地居住者と地域交流の変化
— 将監団地を事例に —

宮城県のデジタル化推進
— 富谷市と七ヶ宿町を事例に —

担当教員 ● 原 義彦

大学生の自立に親子の関係が与える影響とは

— 大学生の自立過程に着目して —

消費者の意識・行動から考える食べ残し削減方法

運動が学力に及ぼす影響

～子供の運動離れ抑制に繋げるために～

性格形成とその要因分析

— 東北学院大学在学学生を例に —

他者が自己概念の形成に与える影響について

外国に抱くイメージと国民に対する好感度の関連分析

日本人はなぜ英語の習得が苦手なのか

日本の若者の主観的幸福度に影響を与える要因について

担当教員 ● 増子 正

運動が高齢者に生きがいを与える影響

山形県における連携中枢都市圏の限界点についての考察

コミュニティソーシャルワーカーの立場から見た一人暮らし高齢者の社会的孤立の要因

高齢者の社会参加が健康寿命に及ぼす影響

～宮城県大河原町を事例として～

少子・高齢化社会における廃校の利活用

利府町が市制移行を目指す目的と予測される住民生活の変化

鹿角市における見守り活動の現状と課題について

担当教員 ● 伊藤 晶文

仙台市若林区の神社奉納物と過去の災害

岩手県久慈川流域の洪水・土砂氾濫に関する地形学的分析

宮城県仙台市における古日記天候記録からみた天保期の寒暖の推定

担当教員 ● 坪田 益美

日本におけるユニバーサルツーリズムの現状と課題

ー バリアフリー観光の視点から ー

コンパニオンアニマルとの共生社会に向けて

ー 産業動向・法制度・保護活動から教育までの多面的考察 ー

不登校児童生徒の自立を促す支援のあり方

若者の死生観及びスピリチュアリティとレジリエンスの関係

「察する」文化の社会的影響とその問題点

色彩とジェンダーイメージの現状と課題

大韓民国における女性教育の変遷と家庭科教科書の分析

大学生における会話スタイルについて

ー ラポートトークとレポートトークの観点から ー

ルッキズムにおけるメディアの影響と問題点について

担当教員 ● 平 吹 喜彦

世界農業遺産『大崎耕土』の居久根の魅力発信

海岸防災林に繁茂するクズの多面的な活用法とその可能性

仙台市新浜地区におけるフットパスの魅力と地域づくりに向けた課題

仙台市域沿岸部における土地利用変遷と水系変化

企業による地域自然を重視した森づくり

担当教員 ● 柳 澤 英 明

東日本大震災時の避難行動から見る適切な避難行動を取るための要因について
— 大川小学校を対象として —

防潮堤問題の長期化の原因と検証
～宮城県気仙沼市唐桑町 鮎立集落の事例から考える防潮堤設計のロジック～

地震の前兆現象とその社会背景についての検討

平野地と三陸沿岸部の行方不明者搜索の為のデータ分析

街路樹における耐波力の検討

土地利用を活かした津波対策

GISを用いた中山間地域における災害分析

平成20年岩手・宮城内陸地震における荒砥沢ダムの被害とリスク検討

米ヶ袋周辺の防災対策方法の考察

震災遺構を利用した防災教育と地域教育について

フィールド×発見

2024年度 地域コミュニティ学科研究教育報告書



東北学院大学

<https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>